ステーション訪問 File 8

アイユウの苑 訪問看護サービス
（山口県・下関市）

アイユウの苑
訪問看護サービス
山口県下関市彦島江の浦町3丁目17-2
TEL　FAX 083-[illegible]

訪問先へのかつ看護さん。利用者のほとんどが不自由ないお宅で、医療ニーズの高いお年寄り。1日の訪問時間は1.5～2.5時間平均2.7回

“その人らしい生活”を支えるために福祉と手を携えながらケアを実践

医療と福祉の連携により 継続性のあるサービスを展開

本州の最西端、山口県下関市にある社会福祉法人松美会アイユウの苑は、特別養護老人ホーム、ショートステイ、デイサービス、訪問介護、訪問入浴など幅広いサービスを展開しています。ここに訪問看護サービスが開設されたのは2002年2月。利用者の医療ニーズが高まる中、充実したサービスを提供するために導入されました。

訪問看護の母体が社会福祉法人であるメリットは、福祉との連携を密にし、継続性のあるサービスを展開できること。訪問看護師が福祉と医療機関のつなぎ役になり連携を取ることで、医療ニーズが高い場合でも福祉での受け入れがしやすくなる、と訪問看護サービス管理者の廣瀬春美さんは言います。

「実際に重度の人をデイサービスと訪問看護の両方でお受けしたことがあります。デイサービスでちょっとした状態の変化に気づいても、すぐに私たち訪問看護師の耳に届き医療的な対応が取れる。生活の場全体に医療者の目が行き届くことは、重度の人を支えるうえで非常にメリットがありますし、利用者さんも安心して療養できると思います」

アイユウの苑訪問看護サービスのスタッフさん。手前が廣瀬さん、後ろ右から小林さん、吉田さん、吉村さん

前向きな気持ちを引き出すケア

そんなアイユウの苑の訪問看護サービスの基本姿勢は、「生活全体を支える」という視点で、日々のケアに取り組むこと。要介護5で嚥下障害のあるKさん（70歳代、女性）は日々のケアの中で機能訓練を重点的に行っている利用者の1人です。

Kさんは以前、舌がんのため舌の約半分とリンパ節を切除しました。昨年、転倒して両足を骨折し手術を受けた後、在宅での療養生活を開始しました。訪問の際には、体の拘縮予防にキネステティクの概念を取り入れたリハビリテーションを行います。マッサージに続いて上半身を起こし、ベッド脇に腰をかけて足の運動を行います。その後は、摂食・嚥下訓練です。Kさんはご主人が用意する食事を取り、不足する栄養は皮下埋め込み式ポートを使用した輸液で補っています。さらに安全に食事をするために、言語聴覚士の指導による嚥下リハビリテーションを実施しています。口腔ケアを行ったのち、筋力訓練、アイスクリームを使用した直接訓練と進みます。こうした一連の流れを、Kさんの状態に合わせて無理なく継続して行うことで、以前は話せなかったKさんが少しずつ言葉を発するようになり、食事量も徐々に増えてきました。

Kさんのお宅へは訪問時、そのときの状態を観察から、ご本人の状態で機能訓練と口腔ケア、嚥下リハビリテーションを実施しています

廣瀬春美さん

「今では、本人が“歩きたい”と訴えています。こうして前向きな気持ちを引き出すことが、大切だと考えています」

ISO9001認証取得で サービスの質を標準化

アイユウの苑では1999年10月、社会福祉法人として日本で初めて品質マネジメントシステム「ISO9001」の認証を取得しました。「ISOが求める顧客満足は、介護保険制度の考え方にも通じる」と話すのは、デイサービス管理者の永田英一さんです。

「介護保険が求める自立支援とは、“自分らしく生きる”という意味での顧客満足を目指すこと。私たちが行っている“当たり前”をISOにより標準化することは、自分らしく生きたいと願う人を継続的に支えていくのに適した方法です」

それは、訪問看護サービスにおいても同じと廣瀬さん。

「さまざまな専門性を持つ人たちが同じ目標に向かっていくためにも、ISOによる品質の標準化はとても有意義。私たち訪問看護師も“その人らしい生活を支えるために何ができるか”という根本的なところから、介護スタッフや家族と同じ目線で利用者のケアに当たっています」

そのために、廣瀬さんが最も大切にしているのが、機動力。

「医師との調整を積極的に図り、勉強会などにも参加して、よいと思うものはどんどん取り込んでいく。訪問看護師が機動力を発揮してこそ、疾患ではなくその人のすべてを看ていくという、訪問看護本来の役割が果たせると思っています」